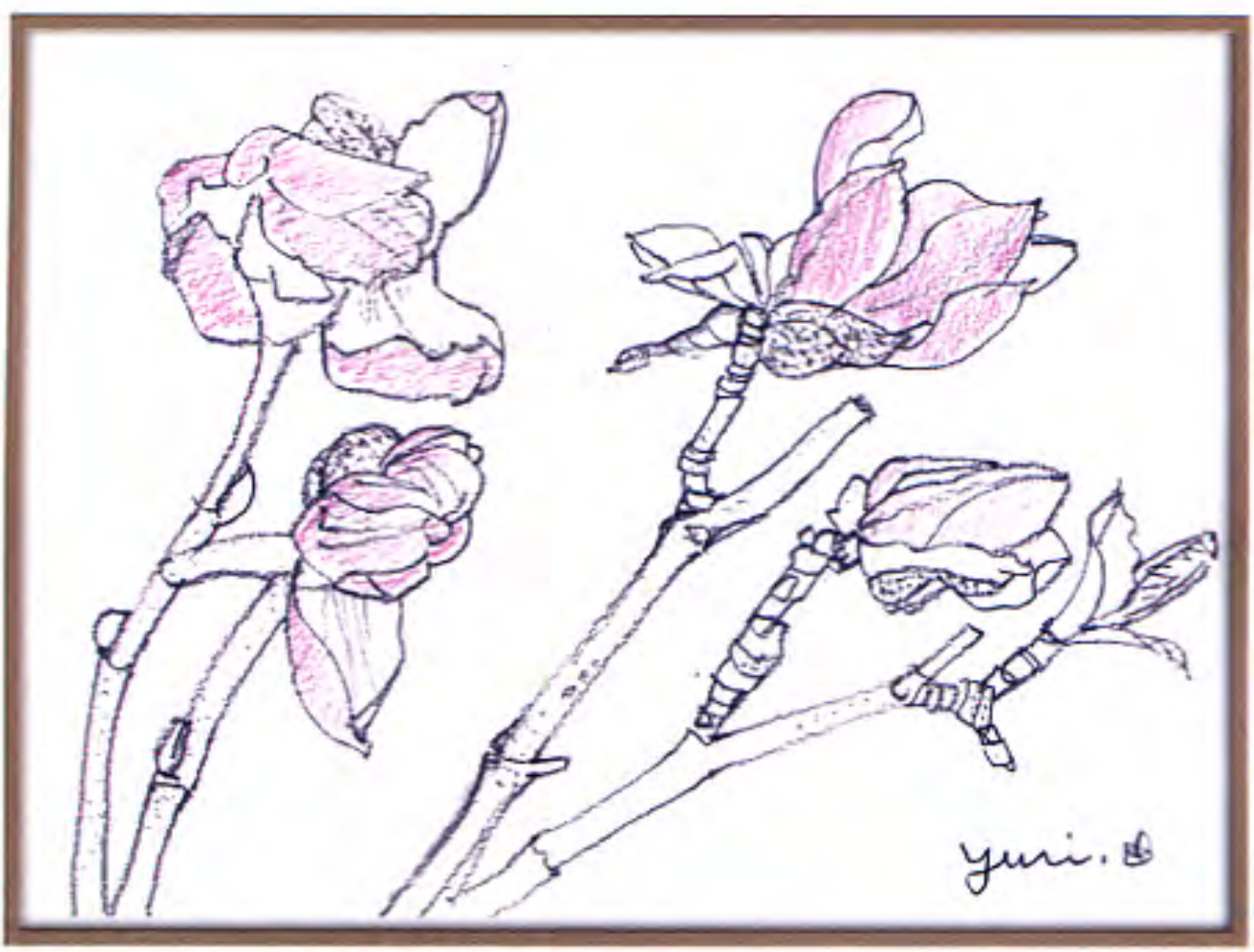
熟年俳句誌

4 2013年 月号

かさね



黒羽集（十八）

佐藤喜仙

冬夕焼ひと日の終の色となり

凍蝶を犬が見つくる葉陰かな

鶯のこゑをはなてる切りどほし

雪柳四方に枝垂孔色散らす

外野フライ捕りたるところ犬ふぐり

碧天へ放つ鈴の音三十三才

寒鯉やおばしまの朱のことさらに

草青み子供の大き魔法瓶

薄氷やゆんづるの音の響き来る

孤影引く春三日月の遠野かな

川岸に仮設料理屋白魚漁

家一つこはされ開く春景色

かさね集

自選句集

「象に乗る普賢」　松本周二

孟宗の青を深めり春立ちぬ
やうやくに山の端見えて春の闇
海苔粗朶に戯るごとき波がしら
象に乗る木彫りの普賢春隣
春光や緑青温き寺の屋根
山川の恵みのなかに犬ふぐり

「神々の森」　古川千鶴

神々の森をくぐりし寒の水
藪柑子新旧並ぶ寄進札
誰もみな無口な宴越前蟹
日本海の淋しさに啼く寒鴉
オロシヤの風の連れくる波の花
冬木の芽明日への力固く秘め

「春の燭」

川井素山

「初雪とあうむ返しの厨の窓
悠然と地表をにらむ尾白鷲
夕映えに鶴の舞ひ降る雪の原
春立ちて万里の波路豪華船
雪解けやわさび田満ちて青々と
敷石に鹿おどしはね春の燭

「七変化」

安藤虎酔

七変化咲く寺庭を浄土とも
八ヶ岳つつみ余れる雲の峰
月今宵一人賞でつつ更けにけり
喘ぎつつ山路を深く紅葉狩
長雨の一人酌みゐる温め酒
冬構地震の村々如何なるや

「桜狩」

菅原　孟

夜桜を賞づる彼方に高田城
花筏堀に浮かべる上田城
高遠の池に映ろふ桜かな
門前のしだれ桜に迎へられ
訪れし三嶋大社は花の雨
ひらひらと桜舞ひちる段葛

「早春」

田島昭久

喧騒の都会に残る冬木立
古き酒肆屋根に名残りの雪積みて
蠟梅の香に誘はれて話咲く
豆腐屋の角笛響き鍋の候
日の当る木々を映して水温む
残雪は岩山の如固まりて

撫子集

主宰選

土匂ひルーペのなかの早春譜
坂道に目刺の並ぶ漁師町
節分や幼き声を遠く聞き
向き合へばいつものはなし春炬燵
産院のガラス戸越しに雛飾

小池清司

春泥に小さき靴跡ふたつみつ
雪やまず増しゆく傘の重みかな
冬終る忘れられたる京大根
立春や居間に流るるモーツアルト
探梅や見知らぬ町の冬景色

米田文彦

千両の実を食べつくし野鳥去る
茹でるはずの花菜コップに咲き初むる
寒紅の濃ゆき唇意地を張る
雪だるま溶けて大きな水溜り
風邪の神鼻より喉に移りけり
雪解けて滴る水や陽を映し

長久保郁子

明け方の川の水面に淑気満つ
連りし尾根の雪解けはるかなり
二月来て目と鼻痒くなり初むる
凍て厳し出勤の坂こはごはと
三日はや皆帰りけり新聞読む

岡野安雅

崖に沿ふせせらぎの音春浅し　青木英林

立春や足取りかるき散歩道

老いた梅今年も数多蕾付け

豆撒いて年の数まで豆食へず

川原の十手のあたたか蕗のたう

絹ごしの光やはらか春そこに　山本達人

大寒や犬も静かに遊びをり

風花の手に舞ひおりて解けにけり

モノクロの景色のなかに寒椿

太陽が柔き矢を射て寒明る

那須野集

主宰選

さいはての野天に荒ぶブリザード　丸山酔宵子
黒砂にまみれる氷塊北の浜
暖簾出て丸むる体冴返る
枯れ芝に目立つ雑草春近し
梅の香が漂ふ庭園海はるか

庭の隅パン屑啄む寒雀　菊地崇之
朝の道昨日の雪の凍てにけり
庭香る一輪咲きし梅の花
双六を上りテレビで駅伝見る
手の透くる小川の岸辺蕗の薹

冬の夕手遊びと共童歌　森岡陽子
寒の雨止みて苔路の緑映え
山茶花の花から落つる一雫
句会終へ肴は蕎麦の雪見酒
節分のふゆる福豆持て余し

初風や鳥居目掛けて松葉飛ぶ　和田勝信
初御籤互ひに隠す親子連れ
吊り並ぶ絵馬盗み読む初社
人混みの山門避けて初大師
足早の皆手に古き福達磨

立春の薄日に煙る島の影
水仙の叢がり生ひぬ崖の道
雨去りてほのと春めく木の香り
節分の小さき声の邪気払ひ
日脚伸ぶ壁の葉影の和らかき

田中清秀

泥水に薄氷流れ道普請
拝殿に祝詞響きて冴返る
皮浮ける蜜柑に春の近きかな
過疎の村無人のリフト回りをり
冬の宿満室にして静まれり

池内とほる

四つ辻の寒風合はさり舞ひ上る
湯豆腐の鍋にとつくり同居せり
飼ひ主も犬も着ぶくれ朝ぼらけ
穴掘れば蛙ひよつこり春待てり
体感は三度も低し寒の雨

橋本修平

街路樹の枝整へて春を待つ
立春のコートどこかに忘れけり
牡丹雪裾を絡げて妻歩く
雪消えて花壇の土に芽が覗き
寒薔薇小さく咲きて路の華

後藤克彦

冬の日や一人歩きの美術館
常緑と枯木の間に梅咲けり
山茶花は一つ二つあざやかや
熱燗や友と走りし日を語る
木枯は一日止まず日暮れるや

柳田晧一

夕闇にカアーとひと声寒鴉
大寒の空にくつきり昼の月
地吹雪や白き木立ちにおじろ鷲
荒波のオホーツクに舞ふおじろ鷲
立春や金魚の餌やり久しかり

吉田博行

撫子集・那須野集鑑賞二月号より

客員　村上克哉

撫子集

日の没りや影絵となれる浮寝鳥　　米田文彦

水辺の公園や回遊式庭園、郊外の池などに秋に北から飛来し、春には北へ帰る冬鳥。水鳥で一番多いのは鴨類、カイツブリ、オシドリ、白鳥、鵜、鷺、鷗など結構多い。浮間ガ池では22種類も観察出来た、水上で首を羽に埋めて眠り、外敵から身を守り水のほうが温かいため浮寝する姿は漂泊の運命と言った心もとなさを感じるが、ひたすら眠る寧けさも感じる。日没までのしばらくの間、波のまにまに流れる影絵の様な浮寝鳥の心安らぐ冬の景。

冬うらら猫とまどろむ昼下り　　本郷宗祥

冬の間にも寒い日が続いたあとには、よく晴れた日がやってくる。春の麗らかさにたとえた日和だ、日の良く当る縁側や座敷の日向にくつろいで膝に遊ばせている猫の温みも心地よく、つい猫と共々居眠りしてしまった昼下がりの穏やかな様子。猫好きならずとも納得の冬うららである。

ぼろ市やはぐれし人を呼ぶマイク　　長久保郁子

十二月十五、十六日と一月十五、十六日世田谷の田代代官屋敷前に立つ市、一キロにわたり様々な出店で賑わう、天正二年に始まったと言うから歴史は古い。古着から農具、刃物、臼、杵、神棚や雑貨まで所狭しと並べられ、警察官も出て交通整理もするが物珍しさもあって大勢の人でごった返す、連れ立って来た人ともはぐれマイクで呼び出して貰う程だ。

木枯らしに押されて刻む万歩計　　小池清司

初冬に吹く強い北風、枝の葉が残らず飛び散り、散り敷いた落ち葉も吹き溜まる。こんな木枯らしの吹く日も健康維持のため恒例のウオーキングは欠かせない。風に押されて歩行する振動で自動的に記録された歩数は何千歩だろうか、一日の目標は達成出来ただろうか。お天気で何よりだ。（以下略）

伝言板

1 第十六回本部句会（原則第二金曜日）

①日時　２０１３年４月12日（金）
　　14：00～17：00
②場所　目黒区「下目黒住区センター」
　　３階会議室
③投句　当季雑詠　５句
④会費　１０００円

2 第十七回本部句会

①日時　２０１３年５月10日（金）
　　14：00～17：00
　　その他事項は第十六回に同じ

3 第十六回吟行　（原則第四火曜日）

日時　２０１３年４月23日（火）
場所　芭蕉の道・芭蕉記念館庭園
集合　都営「大江戸線」森下駅
　　改札出たところ　11時30分
昼食　「みや古」推奨「深川めしセット」
　　１５００円
句会場　芭蕉記念館会議室
出句数　嘱目３句
費用　交通費・昼食代各自負担
　　会場費均等割り
申込　喜仙宛４月20日まで
　　（ＦＡＸ又はＴＥＬ）

4 第十七回吟行

日時　２０１３年５月28日（火）
場所　旧古川庭園
集合　庭園正面入口前　11時30分
昼食　各自持参
句会場　滝野川会館
出句数　嘱目３句
費用　交通費・昼食代各自負担、
　　句会場費均等割り
　　詳細は次号にて

5「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品（十句）、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。
年会費　１２０００円（前納）
　　ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付
見本誌　４００円（切手可）
見本誌請求先
　　１５２－００３３
　　東京都目黒区大岡山２－７－５
　　かさね俳句会　佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

一、俳句は世界最短の「詩」である。
二、有季・定型・文語体を旨とする。

Ⅰ 前提

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①
「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②
「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③
「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④
「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤
「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③ 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

Ⅱ 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。
現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現
主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞
地名・固有名詞は一句の中にあって季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切
形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。
例　完全な三段切　奈良七重七堂伽藍八重桜　芭蕉
　　三段切でも可　初蝶来何色と問ふ黄と答ふ　虚子

五、前書・ルビ
前書は慶弔の句にのみゆるされる。
ルビは誌中では使用しない。

Ⅲ 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。